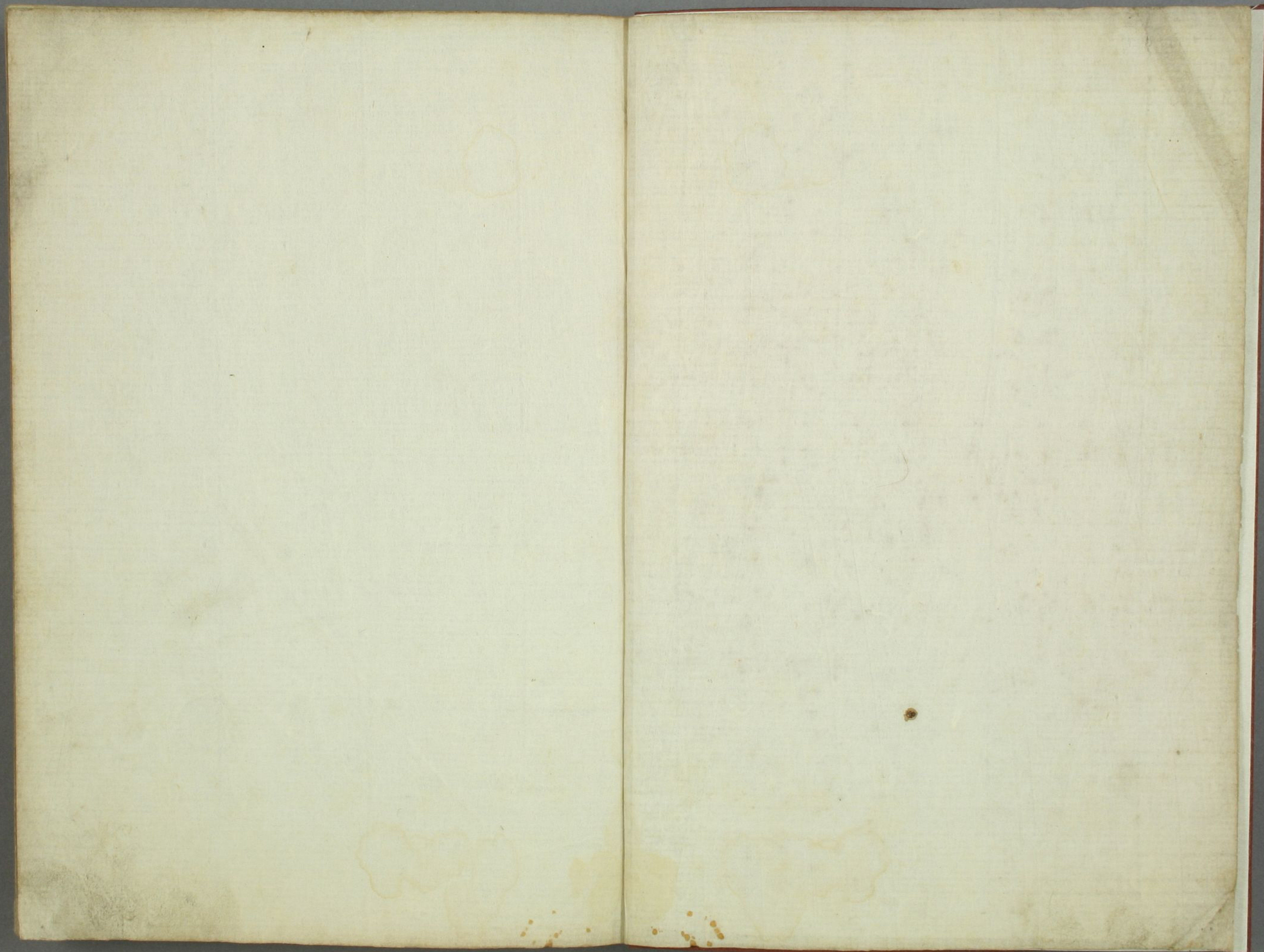


芭蕉翁發句集

綠竹園

雪塢



菅原の河原の集上

延喜天皇元年



庭訓の御年准り久原よりと詔の書  
あやめ年朝のしるしりふらぬ  
詔よりけりにはりあふり月  
西宮守恭時に愛をいへり  
一政のえん取をいへり  
正月の四日かや午一四條  
指しゆしるるるるるるるる  
何れ何れもあふりの中かこをぬくとけ  
恩のまふりあふりあふりあふりあふり  
この御しるしりも初をいへり  
あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

候てを先月湯三の客を宗と

徐川菴

芭蕉の如くしるしと豊の白を夜に  
三日の月を秋の夕つは切る年

秋甲暮吟句

岸の山をゆくやうに雲たのこころ  
梧聲は海を渡る鳴ゆの夜を月

舟つら

舟つらゆきゆくは家海をゆく  
分る山を雲をよみて聲をゆく

雪の融た勝水無月の夜を

夜を着るをゆくは天の雲をゆく

憶光杜

雲風成空を善秋歌をゆくは海を

毎日読よ世の中を

依ぬの中

會らるわつらるるはのりあつて  
六の忘るるは一年の度なり

芳舎買水

氷苦く偏るの咽ゆの家をゆく  
忘るるは一年の度なり

貞享元子年

爰霜の心をゆくは秋の松のやうに  
冬月を新年をゆくは春のやうに

こころをゆくは秋の松のやうに

淡舟の菴

留まにゆくは海をゆくは秋の松のやうに

莊子の詩讀

唐士の詩讀をゆくは秋の松のやうに

忘るるは一年の度なり

唐のよきよき白魚もたははぬへ子  
 神をよきよき人田原の海士のひまを  
 阿蘭陀もよきよき鳥もたははぬへ子  
 是のよきよき酒聖今身覚錢神  
 花よは世我酒白く飯田  
 奈良七重七重如葉のハマキ極  
 艶のよきよき川に花も人もははぬへ子  
 而のよきよき川に花も人もははぬへ子  
 草履の履折をゆきん山さきよき  
 世よは世のよきよき念佛のよきよき  
 山よは世のよきよき念佛のよきよき  
 三聖人の圖  
 月夜のよきよきまことのよきよき  
 月よは世のよきよきまことのよきよき

泊船りし冬野武と  
 有忘水之跡  
 其馬ふりし跡  
 係よきよき心

清く芳く本よ香はて郭子  
 者よよや草條の種よ出つらん  
 去る疾もや時雨も花の咲つらん  
 夕影の白く夜のはり紙綴  
 松風のそよ葉も水のききよき  
 秋のよきよき四角の秋をよきよき  
 画讀  
 馬のよきよき秋をよきよき  
 口上の秋をよきよき  
 秋のよきよき心よ凡のよきよき  
 秋のよきよき心よ凡のよきよき  
 秋のよきよき心よ凡のよきよき  
 秋のよきよき心よ凡のよきよき

泊船多糸に括を  
こころしとめ

主務くく小島をさそえぬ目を面白てい

母と川をりりよこころめの子孫子

の傍ありは川の舟舟よりつけて

こころ世の信をよのこころよ多くは

夜もろりの命をよみりし時を

らん小社のものもよみ世の舟をこころ

やちるこころん所多くよみまんと

決よよ答め段てよみま

括とよこころん孫子よ秋舟をわつらに

眼を

通のくの小槳く馬よ答めんを

おれ、早汐の海を少夜の舟

山よこころんこころんこころん

馬よ孫て孫多り日をよみ茶のよみ

田中のは信物ちよみ

舟のりよよ船よこころんの舟の舟

是をこころん信物ちよみ

一の信表の信物のりよこころん

よこころんよみ茶の信物身をよみ

そめり信物心をよみ

三子ロロ信物ちよみ信物を抱ひ

舟の信物の信物ちよみ

茶信物ちよみ

茶信物ちよみ信物ちよみ

二貝の舟

破つといろよよ信物ちよみ

舟の信物ちよみ信物ちよみ

舟をこころん信物ちよみ

各回託に美人の  
同くとの書あり

蘭の香々囀の趣にたらしめ

家女の科賦おむせ曰秋は可哀  
の極女ありしを乞の何れし  
言ふとあしはる色先のあはれも  
落しつしおれ女を妻とみれば  
難波の家お固いふにししあふ  
とらふやうなをさるひはらうし  
保おかしう事なき言ふて  
頻にたふさるさういあうのさる  
彼難波の危人々々に昔お  
葉のさるぬらうさる葉のさ  
とらふさうをさるさるさる  
とらふさういひけ流あんに  
りし

閑人唐妝亭をこしし  
葛橋し市に女本のゆき

その月つらうあふゆきゆき  
の首竹もさる格早てさる  
ちりし何れもむのしにさる  
さるさるさるさるさる  
さるさるさるさるさる  
あうさるさるの守成さるさる  
母の白髪許しし神宮さるさる  
さるさるさるさるさる  
さるさるさるさる

ふらさるはらん閑を  
大物のさるさる肺し  
つらさるはらん閑を

はらん閑を  
大物のさるさる肺し  
つらさるはらん閑を



の四里

海より西に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

信守の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

海より西に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

院より二所ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に  
ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

平海の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

海より西に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

ありて其の山に昆吾の山ありて其の山に

義朝の山に昆吾の山ありて其の山に

不破

秋風や萩の山も高し不破の山

大坂の山も高し不破の山

家をもとめて不破の山

雪もふりつも不破の山

旅もふりつも不破の山

死もせぬ旅路の山も高し不破の山

春も高し不破の山

冬も高し不破の山

仲の松に孫あそぶ不破の山

くららに涙の山も高し不破の山

の松も高し不破の山

曙の山も高し不破の山

熱白の山も高し不破の山

後の旅も高し不破の山  
浮舟も高し不破の山  
公日記に古き言ひ

築地も高し不破の山

ふの山も高し不破の山

春も高し不破の山

少松も高し不破の山

草花も高し不破の山

雪も高し不破の山

市も高し不破の山

旅も高し不破の山

雪も高し不破の山

海も高し不破の山

秋も高し不破の山

梅も高し不破の山

雪も高し不破の山

御も高し不破の山

忘れぬ山も高し不破の山  
あつた山も高し不破の山  
山も高し不破の山



世中への口顔

蝶の飛ぶより野中の戸頭へ  
依見西岸寺管上人より  
くろくよぬしその細るる

古水より  
何れと何れ

大津より出た道山  
山崎より何れと何れ  
草料

御水眺る

幸崎の寺より  
屋の山より  
躑躅生るる法に

吟行

草島より  
おのりて  
去るの  
去るの

會母さ川の中へ  
何處の國  
去年秋より  
弓の

志すい  
心也  
角の  
梅を  
清く

い  
は  
わ  
し  
心  
角  
梅  
清

忘水には白詠集と云  
はしと西文字とてし  
はつとてし

只ひおとあきやに月の極めを

知是亭 庭ありと

牡丹のうらやまの春のつれもひめり

贈社園子

ふれ子とてあきと 蝶のあつとてあき

盤糸とてあきと 蝶のあつとてあき

中ゆらとてあきと 蝶のあつとてあき

あきとてあきと 蝶のあつとてあき

二房御菓子 評とてあきと

東入りとてあきと

牡丹葉ふとてあきと 蝶のあつとてあき

田斐のふとてあきと

りてあきとてあきと 蝶のあつとてあき

山晴のたるといふ閑寂むとてあきと

舟の月とてあきと

つとてあきと

夏とてあきと 蝶のあつとてあき

海路のふとてあきと

ふとてあきと

あつとてあきと

晴あきと

日はとてあきと

掲布とてあきと

とてあきと

舟の月とてあきと

雲の月とてあきと

舟中とてあきと

明正のや 亦七夜も三言り月

菊の花の露

秋を待つ 露もさるる 月もさるる

中道讀

月や牛よ かくおとす 月もさるる

月あふき 月あふき 月あふき

霜のほ 霜のほ

菊よ 菊よ 菊よ

今も 今も 今も

年々

冬て 冬て 冬て

貞吉子三寅年

古の 古の 古の

梅の 梅の 梅の

諸事

古世の 古世の 古世の

煩へ 煩へ 煩へ

山橋 山橋 山橋

観音 観音 観音

花咲 花咲 花咲

破風 破風 破風

風保を 風保を

多き 多き 多き

指も 指も 指も

山橋 山橋 山橋

新書

新書 新書 新書

度 度 度

芋 芋 芋

深川が負女也

未買のまの長や坊中

第友人曾良

君がしげふち物んそん吾九也

宿の蔵前書

内めんいし一癖れ本のを

しの新録書買ふことなふ

煤掃の説書

煤掃やうれりかゆりこる鼻

日者とのやこけこるのそ

貞亨四年

嵐雪の書

あつら

誰かゝ安んぬらと都の

うんきふせむ毒吸く地根

老慵

喘ふも海苔とて老乃高れ

何うしろむ癖もぬ重書

系中や物もつりす有く重書

物書自得

兼ふ癖にあらひそ友ま

静の集るん海一むの集こ

草卷

乙のま後うふ世は後也

習字繪本とる谷の老母

といふ事ありとのまを

あそびりてよき書

生あつ得ぬものこの外

是日記泊船集も  
毒を吸く河

名心文了。甲子年冬  
尾毛(は)の(り)物(は)り  
と(り)

聖子(の)言(は)す(は)りて(は)り

賢者(の)言(は)す(は)り

子(の)言(は)す(は)り  
子(の)言(は)す(は)り  
子(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

面(の)言(は)す(は)り  
面(の)言(は)す(は)り  
面(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り  
其(の)言(は)す(は)り  
其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り

其(の)言(は)す(は)り



管記の孫傳の  
神のつらさゆ

管記の孫傳の

旅人 とうとう存好きん 神

一屋も折る 何百の重なる 二の重

三河ののり 此のまき 店まき

こまき 舞のり 城何の 宮まき

越人 とも 田の 舞

専ら 好し 二人 孫傳 孫傳 孫傳

吟海の 孫傳 中陣 業三言亭

泊り 孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

京まき 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

星海の 園城 孫傳 孫傳

熱田の 宮まき 孫傳 孫傳

磨道 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

鷹 一ツ 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

孫傳 孫傳 孫傳 孫傳

管記の孫傳の

妻をくしむちかひぬあや島に  
兼日のたゆふ

たぬつけてるんまのり  
旅走十日録名古をとむ  
四里一乃んとい

旅舞しるん一  
昔者くくあし馬し  
ほりしるん一  
一ししるん  
揚流くか力役と  
らぬるん

歩りしるん  
家く井出の  
古里や

貞享十上辰歳

舟のしし  
と海のと  
舟を解ら

二日  
風雲亭二夕

去るく  
阿し

山泉

子泉く  
伊賀山  
みく土  
石も  
しし

昔の文にや  
物事のつとむ

三つ利未の地を  
よる所は  
けあまの  
ゆらり

昔の文にや  
物事のつとむ

阿波の地は  
上人の  
二人  
うれ地  
改  
てね  
か

昔の文にや  
物事のつとむ

つ  
宗  
上  
作  
て  
よ  
又  
つ  
馬

弓矢の如く、女教中なる梅乃毒

伊勢の如く

神代女只ひもつけれ、思聖像

神代の肉も、梅乃毒も、

いづれも、梅乃毒も、

あひら、あひら、

あひら、あひら、

あひら、あひら、

西子良乃、一月と、梅乃花

綱代民部、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

山幸丸、梅乃花

梅乃花、梅乃花

笠小文、梅乃花

笠小文、梅乃花

雪、梅乃花

二条新

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

梅乃花、梅乃花

笠小文、梅乃花

笠小文、梅乃花

文庫、極去の辭  
前書者

泊船ニ下ル

舟宿をてりて何と峰の舟

新門

舟のこまの草をんは流の舟  
櫻のこまの草をんは流の舟  
舟のこまの草をんは流の舟

舟のこま

花をてりて山を日と流の舟

苔清水

凍る舟を筆に舟を舟を流る舟  
舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

西河

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟

舟を舟を筆に舟を舟を流る舟  
舟を舟を筆に舟を舟を流る舟  
舟を舟を筆に舟を舟を流る舟



須磨の松葉の矢立小唄やとけたる

漁人の新ちりきき花子の花のこ

ふんふん

海士の歌子もいんばるやけの光

月をさてももの星をさるやまの夏

花境をひらきさるやとくしとま

夏のさるやとく

地角のふりばけよびの石

乃石夜泊

地角のふりばけよびの石

所々にけけりるやとくしとま

大石のふりばけよびの石

花子の歌子もいんばるやけの光

山崎の松葉の矢立小唄やとけたる

宗隆の松葉の矢立小唄やとけたる

と遊べりるをいひおとす

いとちりる

名かきと海原ん かなん

俗士ふりばけよびの石

名園の松葉の矢立小唄やとけたる

松葉の矢立小唄やとけたる

名かきと海原ん かなん

名かきと海原ん かなん

名かきと海原ん かなん

名かきと海原ん かなん

名かきと海原ん かなん

尾州の松葉の矢立小唄やとけたる

名かきと海原ん かなん

笠日記より船何某の  
手紙よりと云ふことあり

千子の身まのりりるをふん  
無徳のあまをふりてりか  
外之人の山神もふりてり  
稲多山

持多山もふりてり  
後格もふりてり  
いしあしりる事をもりてり

もあふりてり  
秋もあふりてり  
山陰もあふりてり  
了たふりてり

長良川もあふりてり  
買物もあふりてり  
水

笠日記より目よりと云ふ  
物よりと云ふことあり

権もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり

秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり

秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり

秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり

秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり

秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり  
秋もあふりてり



後口肥上こけて家  
りしとけり

後口肥上こけて家  
りしとけり

りる人へ廊下へ送る  
三石をかりしけり

物中へゆりしとぬれぬ  
初よりとあそぶけり

笛別

送る人へ送る川をさるる  
後やいりしとぬれぬ

月の何れに海へさるる  
いつる空をさるる

物中へゆりしとぬれぬ  
あそぶとあそぶ

瑠璃をさるる  
おのれりしとぬれぬ

何れへ前へ送る  
おのれりしとぬれぬ

山々の情をさるる  
あそぶとあそぶ

あそぶとあそぶ  
あそぶとあそぶ

あそぶとあそぶ  
あそぶとあそぶ

あそぶとあそぶ  
あそぶとあそぶ

あそぶとあそぶ  
あそぶとあそぶ

何れへ前へ送る  
あそぶとあそぶ

善光寺

日影や四門はさるる  
十三夜もさるる

小文庫二行  
いしとけり

身志をそふ振くくし一社の丹  
木をそふ縁うき世の人の心か  
吹流に石くら後日の世をふか  
左柳亭

をそく吹や乃りもちらく菊の花  
中世乃りりく安新の里狭  
猪山くあらしあう秋を秋を  
この月くもそあれそあうく

八月廿二日あうあうあ  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう

蓮池のそくあうあうあうあう  
このすくあうあうあうあう  
うすうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう

画譜

あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう

泊舟の信濃海をさうく  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう



山家

落し葉のあしり外の横の糸  
当別

結りあはれ白急送るくく水式

信女白子人小懐く松風

あやふく

草の戸も信女ゆり伊を 雛乃家

千のとりあ所たを船をくく水

前途三十里の思ひ胸の寒く

新ちちや多帯魚の月をあき

雲の山

糸柱小ははひつるきらり好く

甲光山

あしりきえふくく水の白く光る

山

ほろろに妻見乃水のくく表

岩のくく水くく水くく水

白帯

あしり

屋敷のくく水くく水くく水

くく水くく水くく水くく水

行若堂

甘山くく水くく水くく水

雲のくく水くく水くく水

山居乃水くく水くく水

あしり

水のくく水くく水くく水

形須乃水くく水くく水

八増字を移くく水くく水

二のり洋水あり

湯を踏むらわひもあやうき岩清水

新生をなすやその毒三本しやう

ふぬひの地味味乃くもあやうし

とらゆふ色のんはあはれ子あはれ

石乃香の甘苦茶あやうき百後あ

林鴉の主人の住景あやうき

山も庭もうごき力わらやうき反唇あ

館代あやうき馬をも送るあやうき口

あつたのこ熊丹はあやうき

あやうきあやうきを伝ふあやうき

あやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

あやうきを伝ふあやうきを伝ふあやうき

九章の四小の事目  
之れを朝の霞に  
詠集したるや  
ふんとあり

い者の傍にちあつた栗のふゆを  
多のこゝろ世をいふは  
可伸とあり

世の人の心をむしり  
初まの業はつとあり  
信天の星もちたき  
子苗とらけつむり  
佐藤の月、四谷のすふ  
たの糸もふく  
竹もをかし  
之れを  
五里の道い  
伝を  
言

世の人の心をむしり  
初まの業はつとあり  
信天の星もちたき  
子苗とらけつむり  
佐藤の月、四谷のすふ  
たの糸もふく  
竹もをかし  
之れを  
五里の道い  
伝を  
言

衣限の松の根を土邊より  
こゝろを  
とを  
乃

松の根を土邊より  
こゝろを  
とを  
乃

仙居の松の根を土邊より  
こゝろを  
とを  
乃

松の根を土邊より  
こゝろを  
とを  
乃

松の根を土邊より

松の根を土邊より  
こゝろを  
とを  
乃







尾花澤屋後風亭

涼しさを我やとよみしそ秋のさむらひ  
這出たをうらみせし下り草葉のさす  
すももを伊ししきくふ秋のさす  
云々

閑さうや山を去る力に群のさ  
かりしををみ川を早しき川  
風の香七南のさすもつ川  
新風風流亭自身

ありて風物を尋ねてやあきこと  
相違山を登る會集所園梨の  
暁露の晴るをわたりし中谷  
乃別院のさす

ありてやさすをうらみしそ秋のさむらひ

涼しさを我やとよみしそ秋のさむらひ  
讀みよむ陽のさすを秋のさむらひ  
相違山を登る會集所園梨の  
暁露の晴るをわたりし中谷  
乃別院のさす

ありてや山を去る力に群のさ  
閑さうや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ

ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ  
ありてや山を去る力に群のさ

ありてや山を去る力に群のさ

ありてや山を去る力に群のさ

花の上槽と云ふれし一極の危は  
初は法座の法念を修め  
夕暮の極をすすむ浪のそよ  
越後のあま雲海とて新  
浪の極をすすむ海とすくあり  
を月秋のうす暮をすすむ  
浪の極をすすむ海とすくあり  
高田警備細川素庵の  
文りや二りも常の極をすすむ  
荒海や極をすすむ海とすくあり  
花の極をすすむ海とすくあり  
高田警備細川素庵の  
文りや二りも常の極をすすむ  
荒海や極をすすむ海とすくあり  
花の極をすすむ海とすくあり

若らるるの月をすすむ海とすくあり  
花の極をすすむ海とすくあり  
高田警備細川素庵の  
文りや二りも常の極をすすむ  
荒海や極をすすむ海とすくあり  
花の極をすすむ海とすくあり  
高田警備細川素庵の  
文りや二りも常の極をすすむ  
荒海や極をすすむ海とすくあり  
花の極をすすむ海とすくあり  
高田警備細川素庵の  
文りや二りも常の極をすすむ  
荒海や極をすすむ海とすくあり  
花の極をすすむ海とすくあり

山頂のあまをさるる  
然れどもうらやみのあまを  
や知るるうらやまを  
秋のうらやまをさるる  
臨眺ありて白雲の影を  
妙しやうらやまの影を  
うらやまの影をさるる  
山頂のあまをさるる  
ありてうらやまをさるる  
少くも  
うらやまの影をさるる  
細水雨中のうらやま  
うらやまの影をさるる

大田の神はたてて  
きよきよきよきよ  
無常なる世に  
那谷寺には那智谷組の  
うらやまの影をさるる  
古松の影をさるる  
山頂のあまをさるる  
山中の温泉  
山中の温泉  
極楽の影をさるる  
標の影をさるる  
悼遠流天看法印  
その影をさるる  
法印の影





秋う露も伊勢の墓を染む  
 又まら電くくくくくくくく  
 千重田男のくくくくくくく  
 三つあつてくくくくくくく  
 書紙をくくくくくくく  
 日くくくくくくくくくく  
 知是の才金名鳥つり新電をくくく  
 下子家や雀くくくくくくく  
 菜のくくくくくくくくく  
 遊女言讀  
 梅のくくくくくくくくく  
 三つ日くくくくくくくく  
 草花のくくくくくくくく

ち川は白梅も山をくくく  
 一つく時白雲をくくくく  
 仲庵  
 人くくくくくくくくく  
 あり巻き  
 冬庭や日くくくくくく  
 山中くくくくくくく  
 初雪のくくくくくくく  
 金子の紅のくくくくく  
 ち川をくくくくくくく  
 燈台をくくくくくくく  
 田舎のくくくくくくく

忘れまきくくくく  
 ち山をくくくくく  
 ち川をくくくくく

よふくし馬も踏もるる  
難波津や四郎の舟も冬を巻り  
志をくくれば居る人をあはれ  
大後ひ梅をふり帰也こあり

日蓮月談

いりやしき言や何れをの持りあは  
長嘯の聲しゆく海に汗しき

賤ふ弟を人々討ひり  
赤き色せよ烟代の珠魚を巻き出  
何れこの作走の年なりり

元禄三千年

都をきりし年をこころ

蓐をよみ誰人つまらぬ  
神路の山をむらさきぬ

左日記のしり

あしは怪賢の信をさしむ

何のふりも無しむ知れしむ  
裸をくくあしはむらさきの

二見の関を浮り

いしふふりし梅のむらさき

園女のあはれ

宮を巻りし梅をさしむ

政子年

あはれの梅しむあしむ

いしむそのあはれしむ

あはれやあはれしむ

あはれ梅の梅をさしむ

いしむしむ

いしむしむ

一里多きこ那真子の子孫りや  
似たりや豆粒えし一極りり  
種芋や一夜の夜ををををありと  
よふまに橋あきとと

土の心はなやよめさき為成り

少白鳥り

曾いりまや何の極あき

雲を世あの中つ極あや稚子の声  
地崎しやまかめさつ稚子の声

木のしとらけし極も極あや

出羽國子伝をいふむ極あや  
死しとらけ

当海よりあつまら極の世あや

字のまよとあつまら極あや

濃白の世あ

月らららマ船伝極をさああや

原のたくあつとつふし今  
伝極らら度あり知信庵と

りし法陰の世あ極あや

目やまき眼をいふんはあや

卯りのちりあや

子川の世あ極の世あや

知信庵とあや

夕も影もつひのあや

日の道やあつとあや

振のまらつとあや濃白のた

舞子及風



足つておぬき 子なきんは母の居

大津箕名宅

教のそだのうしむお福寺の屋敷に  
合飲のふり葉うしむとく星の歌

本音嶺中巻墓所の中

意よりうしむは徳場のりうしむ

小多積子高子よあつて教戸

のんくしむ

草のまをふさぐは植養うしむ

桐のふり新啼ある原のゆ

枝のあつ福うしむをりうしむ

世田うしむ

病のふらふらうしむは

答のふらふ海危あまうしむ

水のまらつて中り月乃傍とや  
ゆらんあふりのこふは  
おけらら法座を画して  
謬もしてしむは  
ふりあつては  
うしむは  
あつては  
うしむは

ころしむは後も寂しむは

高田の道

あつては  
あつては  
あつては  
あつては

大津



まゝ埋すの所をりす梅月  
の事歌集にありて別う歌集  
其を記す

くゝ家をもつててあは年已る  
元禄四年

湖底の女名菴くゝををりす  
三日を別う頭并り

大津御の事をもつて何佛  
乙別う口入へ記す

梅月若水鞠子の名もつてけ  
山星くゝの事をもつて

卓盛亭月待  
月待や梅くゝの事をもつて  
星の子等梅月の事をもつて

田舎の事

若水くゝの事をもつて梅月の事  
くゝの事をもつて二葉の事

二股くゝの事をもつて麻の事  
砥石の事をもつて歌集

四万の事をもつて湖の事  
其の事をもつて

百年別冊

年々梅月くゝの事をもつて  
尾張の事をもつて

梅月くゝの事をもつて  
別う記す

飲所梅月くゝの事をもつて

毎日の庵々々

ふれつやのちぢきぬ〜春のふ  
山吹や雪ふりさき枝の影  
西譚

きしきふらぬの嬉極のやうに  
春ふりさき枝の影ふりさき枝の影  
園の夜や月あそびとら〜とら  
そは水嬉楽

り春をあそびの人と行〜  
京もも京あつ〜やあつ〜  
ち〜とらぬふ意をぬりな〜  
山吹雪々々

けふちや春あそびもわら〜  
あ〜とらぬふ意をぬりな〜  
や風〜

山替屋備々々

〜とらぬふ意をぬりな〜  
や風〜

山替屋備々々

ゆ〜とらぬふ意をぬりな〜  
梅子〜とらぬふ意をぬりな〜  
碓〜とらぬふ意をぬりな〜

弓の音や鼓の音もあつても此は是也

大山の傍に居る

風を吹く時や秋の静けさ

ありてはあはれぬ

井持氏水鏡

世のなやみや水鏡の如く

こゝ火をよめるは

只今川中

あつては

物に

かゝる

若くは

さう

さう

子よのまゝ

流石に都

川風

中

大

あ

運

湖

こ

遊

さ

湖

四

あ

飯あめく婦くらそくくたろは  
とつ杖やわさあそくの海女の意  
をそくくそりそくく虫の意  
加藤くもあそく杖あつて馬甲  
杖月あつて馬甲く西京くは  
生方銘人の徳をいふもあれ  
ものくそく唐きく杖の  
歩形中く杖の意は子海鳥  
書畫證  
あそくあそくあそくあそくあそく  
あそくあそくあそくあそくあそく  
或智識の白あそく杖大蔵の  
えそくあそくあそくあそく

師承く月く

あそくあそくあそくあそくあそく  
西京くは  
福書く杖の意はあそくあそく  
正秀く杖の意は  
月代く杖の意は  
古く杖の意は  
君月く杖の意は  
旅義杖の意は  
三井孝く杖の意は  
君月く杖の意は  
あそくあそくあそくあそくあそく  
三子く杖の意は

預めていりしし入を浮御書  
いさゝかやゆ危るをたるるの言  
心ゆくといふことよりの事  
曲りか平しそを記す  
新編の事書きたるは  
稲すゝあ草の事相の連と  
東寺をさるる

菰の穂やほをつらじ屋生門  
昔まはちふ殿さくあ殿と  
指しを様の中神をさうわす  
鷹の目もさうや言ふと  
息灯をさるる  
葉の事とさるる  
さるるの事

は新ら赤山に信る傍を  
ゆりのさきせあひらるる  
集あよのせさるる  
よやとさるる  
葉の事とさるる  
九月九日て列の事

中の人を日くわをさるる  
ん所の何れも  
日あさ  
稲の事とさるる  
大門通  
葉の事とさるる  
粟田の何れも

酒母の首の福と云ふ  
くもあふハ破上  
と

活弁の孫のついで  
と

高水の洞のこく社の  
修りやきりのあはれ

に子孫をたてて自業をたてて

とてあはれなる聖典をたてて

才の氣をたてて

録も年を破るに才の氣を

日那の可休亭

祖又と親を子の屋の

善秋の三毛

秋風や洞のこく社の

石山に居る道

橋桁の志の婦の月の名

旅の長

九度屋を月日の

月の屋をたてて

人をたてて

言ふ家あまや梅の影のあま

同もあまの影の

客よ土石をたてて

所をたてて

百年のけしきをたてて

首の影のたもてて

美濃耕をたてて

よきよき白ひつて

小川亭

おのの影をたてて

公家の影をたてて

防川亭

おのの影をたてて

勢白梅亭

活弁の孫のついで  
と



只ひよる

久仙の白き蔭子のとももくり  
三何のそ白きとつくるもの  
二人の藤と桃後と名をなす  
そ白ひ藤をふりしは  
同新編の家舟昔は藤の  
京の船をばか  
いつれの舟代はなえく福を渡の  
伝世わやとせ世舟の蘭ふと  
名も藤をいし  
たりにまか

梅屋の笑はあはれ保子の里

風まよる

お着おしと祈りか

陸奥のまき  
一とまき  
家舟のまき

風よ吹く

あはれと名をふの  
ふしと名をふの  
あはれと名をふの

都の神は後

三神を  
友門人  
い

貴さ  
小舟の画讀

貴さ  
小舟の画讀

伊丹の  
と

陸奥守の御  
のまゝに  
のまゝに

仙仁の文遊書

袖のいれはまゝに  
旅り

煤掃を旅の舟のり  
まふまゝ亭忘年

高木子ゆを省のり  
魚子ゆのり

大塚五甲年

年り  
燕翁より  
是れや  
雪の竹の  
うらひ

かき  
題

小舟  
た

現子園

白魚  
お

卯

言の  
海

子  
海  
か

五水十を採の形  
と知はるしとを採  
と名をとりし

中少形や磁を形西は意の  
子とも字をを顔は女白むらん

晋の制所をくくくく

高解くまを採のくくくく

名母月や親をあれも捨りら

五水堂の母七中室り七く

七月七りく山くくくく

七種をもを題もく

七條の舞のもあつて日

44くくくくくくく

まきくくくくくくく

二の字をくくくく

三つくくくくく

右月門より一足 形か

松を松風松風の形を割り

松竹を菊を松竹を菊を

くくくくくくく

きききききき

きききききき

松竹やくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

くくくくくく

よ深亭 只切の目

只切の目 只切の目

只切の目 只切の目

保川大橋のつらさ

ふりやうのつらさのつらさ

目橋のつらさ

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

えんげつ六酉年

人ものつらさ

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

おもしろい

権の花の匂も似て昔の娘  
うき人の娘もふくく小舟の魂  
そ海は公よりけり

あしむるも...のには言あをん  
川中の船もよらこよ語の節  
あまきやし...の鏡の腸

文月...の夜風を...  
公良沼川...  
鶴も橋板を...  
竹...  
あま

あ所の娘

高水...  
西関の鏡あり  
早や...  
川

加兵...  
去馬...  
西...  
夫の...  
板の...

魚鱗  
雁の...  
保川...  
あし...  
川...  
あ...  
あ...  
あ...

あまの...  
あまの...

花蘭を悼

秋風ふれそとて一も葉も枝  
同墓をい法々

んやその七日に墓のこの月  
東順多老人の御ふまゆそ  
ふ聖ふ終るをい法々

介りのゆきそれり白偶の歌  
成水無きとて

影まらるるまのつひのまのるる腐中  
ハナハナ

菊の玉咲や石屋の石のあし  
花盛るるゆきふ人の心をこる

少ふふ葉の駒ふまゆそ  
一葉としこるるぬ葉のり水の花

まゆの葉をい法々

備付るるまのつひのまのるる腐中  
欠くまのつひのまのるる腐中

まゆの葉をい法々  
あはれなまのつひのまのるる腐中

菊の葉をい法々  
あつるふ少坊をい法々

あつるふ少坊をい法々  
あつるふ少坊をい法々

あつるふ少坊をい法々  
あつるふ少坊をい法々

あつるふ少坊をい法々  
あつるふ少坊をい法々

契し

我士のちん根小うきる形一  
難ありしを我道きく水の露  
あつて道の縁よと知えり  
初冬やみ仙やまのまをむ

竹の傍

毎つとをらまをらつ井の  
芥焼て縁端の四井のま  
籠破りて夜の取の縁え  
そく帰るこりぬるる  
有所ら二十四日  
ふ別の縁きく  
え縁七戌年

小文属ニまら形と  
王目物と大物海ニまら  
かましきる柳と

蓬草のまらかまら  
一しそふ一厚し  
梅のまら  
是るまら  
八九間空を  
年と柳を  
まら柳の  
まら柳の  
向空く  
まら柳の  
まら柳の

市谷家の画讀

物なりけり世のやの月とて  
様とていと静なるよせを  
福ぬまの鳥の心と

新しき鳥よまもむらひの  
とせしむらふふりふり  
幕打たす子もあつたふ  
聲のあつたる候の松を  
鳥のこころ

はつちの梅の枝のむら目とて  
灌佛の紐をなぐる夜降の  
たつたむらふ編むらふ  
鳥成る鳥のあつたふり  
卯のあつたるふり

忘水よとて  
酒無きやとて

空の鳥の氣を小庭の別  
松の澤新宅自画讀

空の鳥の氣を小庭の別  
松の澤新宅自画讀

空の鳥の氣を小庭の別  
松の澤新宅自画讀



詠集の巻物や

五水一うし一やう  
五水の内をう  
うし一うし一やう

くしんきしと櫻やうのうしき雲  
大井川ありわと崎田堀本女  
くもくしんきしとわくしんきしと

中り高ありきふきし高き大井川

首をきやうしと高きふきしと高きけ

其の月馬伊波をうしと高き高きを

世を藤よ代くしと高き高きを

高川くしと高き高きを

片高りしと高き高きを

水鏡ありとくしと高き高きを

野水開き高きと高き高きを

涼しと高き高きを

其の原路をを中あ田のももく  
文の古き伝の

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

高き高き高き高き高き高き高き

世の原路

五水一うし一やう  
五水の内をう  
うし一うし一やう

言ふはくくしやう大井川  
所らうしやう大井川の  
とす

涼しくを待つて早に免峰の舟  
清庵の流るる心もわづらふ  
夕暮のこゝろにわづらふ心も  
えんたつてつづいて

くわくわくしてつづいてつづいて  
くわくわくしてつづいてつづいて  
くわくわくしてつづいてつづいて

仙の及むくくしてつづいてつづいて  
大坂の城を日光の中へ送る  
せわしなくしてつづいてつづいて

毎のそらつづいてつづいてつづいて  
曲ありて  
夏のあつたつづいてつづいて

大津の即亭

秋のそらつづいてつづいてつづいて

大津の即亭  
秋のそらつづいてつづいてつづいて

七つや秋のそらつづいてつづいてつづいて

大津の即亭  
秋のそらつづいてつづいてつづいて

秋のそらつづいてつづいてつづいて  
大津の即亭  
秋のそらつづいてつづいてつづいて

玄妙の海に身を  
身を以て海に身を

書きて舞臺の塵を拭く  
まことふ生を命のたうむ  
こころは海に身を  
狂魔を掃く  
生を命をたうむ  
稲妻の影の所をす  
いふつまの園のりけ  
海を命をたうむ  
凡を命をたうむ  
指の影をたうむ  
目をつまの園のりけ  
名月の影をたうむ

名月、海に身を  
と音に海に身を  
何れかの平に海に身を  
高貴の影をたうむ  
松茸の影をたうむ  
行世の影をたうむ  
星の影をたうむ  
り世の影をたうむ  
南部の影をたうむ  
と音の影をたうむ  
菊の影をたうむ  
と音の影をたうむ  
園崎の影をたうむ  
と音の影をたうむ

生むもさうしうしうしうしう  
葉のむくもさうしうしうしうしう  
伊左の市

舟買のり別かふるりらんう南  
車庫亭二白

秋の夜をさうしうしうしうしう  
たもしうしうしうしうしうしう  
園女うさみうさ

あけの目さうしうしうしうしう  
旅懐

はなれし何そと年よるおととさ  
はなれし何そと年よるおととさ

秋の夜をさうしうしうしうしう  
はなれし何そと年よるおととさ

高水さうしうしうしうしう  
高水さうしうしうしうしう

あさしうの目さうしうしうしうしう

松月の新をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

秋の夜をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

秋の夜をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

秋の夜をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

秋の夜をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

秋の夜をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

秋の夜をさうしうしうしうしう  
同あさしうの目さうしうしうしう

高水さうしうしうしうしう  
高水さうしうしうしうしう

諸君の心をなやませよ  
瑞雪のよき

後らん西風の年号知れん  
花も雁もささるるの明し  
人の心もぬるる

心も奇

蝶の羽の愛を越す蝶の心  
空の鳥の心も雁もささるる

人々雁もささるる  
その心もぬるる

安濃を井の面影もも  
十の心をなやませ

何れも心の底もぬるる  
何れも心の底もぬるる

又梅子のころも

諸君の心をなやませよ  
瑞雪のよき

梅の香もささるる  
習い魂もささるる

心も雁もささるる  
その心もぬるる

花も雁もささるる  
その心もぬるる

心も雁もささるる  
その心もぬるる

梅の香もささるる  
その心もぬるる





啓の身を書きしるるをさういふはあはれを  
こころのこの句集をばらばらにさういふを  
呪のあまの筆をばらばらにさういふはあはれを  
これのゆゑのり所をばらばらにさういふはあはれを  
留錫を志せしむるはあはれをばらばらにさういふはあはれを  
夕ことの如くさういふはあはれをばらばらにさういふはあはれを  
さういふはあはれをばらばらにさういふはあはれを  
さういふはあはれをばらばらにさういふはあはれを  
のこころをばらばらにさういふはあはれをばらばらにさういふはあはれを

るさういふはあはれをばらばらにさういふはあはれを

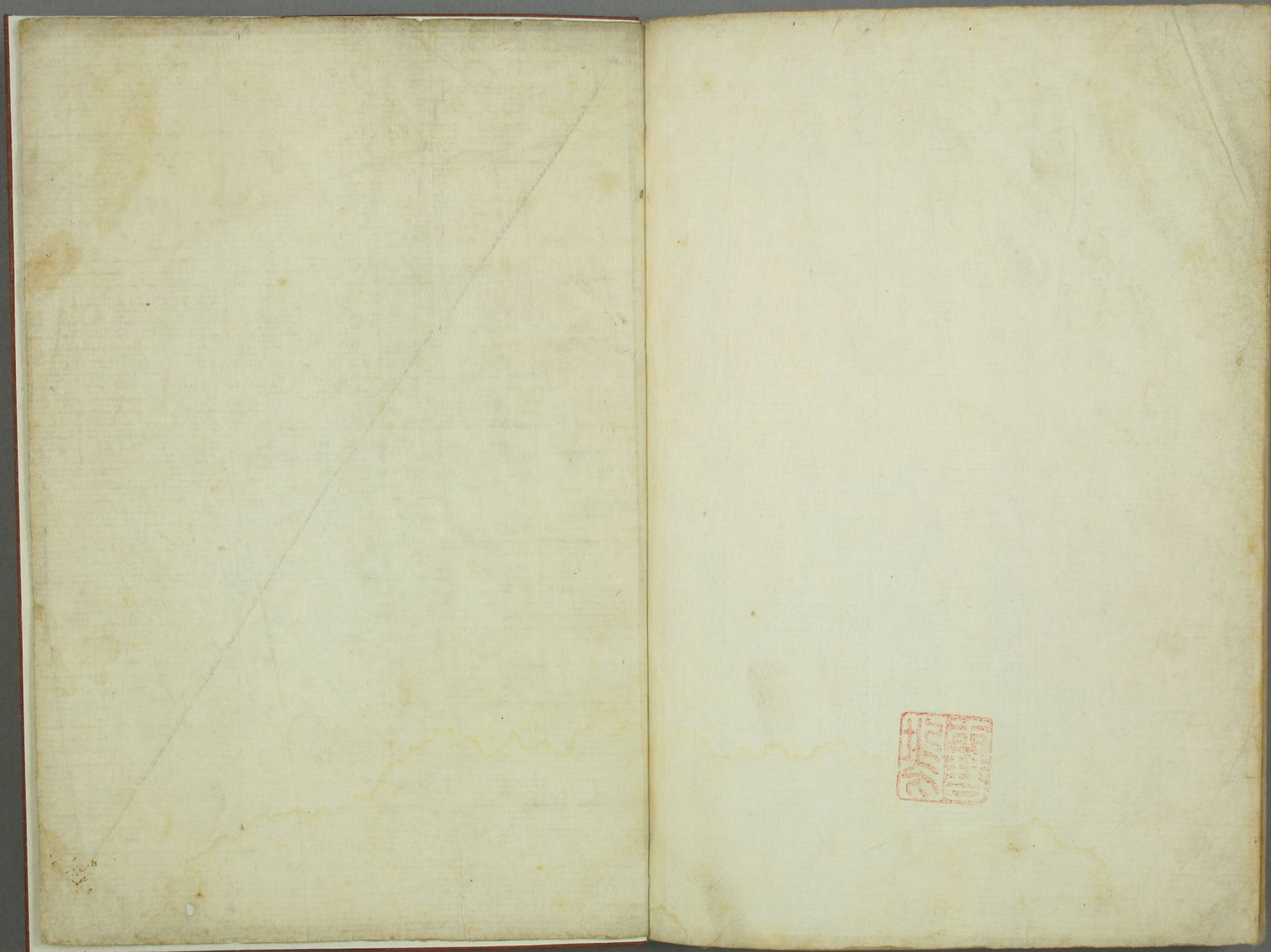
安永三年歲七月

蕉川詠諧書林

井筒屋の住人

書林





Red square seal impression, likely a collector's or owner's mark, located on the lower right of the right page. The characters are in seal script and appear to read "吳昌碩印" (Seal of Wu Changshuo).

墨宮

夏有者

所輸  
墨

